

琉球大学学術リポジトリ

取木、挿木法

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 友寄, 長重, Tomoyose, Choju メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20629

5. 乳房炎の手当 乳房炎が発症したら先ずBTB試験紙で乳のpHを検査する（これは早期診断の方法として推奨されるから常時準備しておいて週一度位全ての牛に応用しておくとい）。次いで早急に獣医師の診察を受けることで素人療法は厳に慎むべきである。治療方針は先づ原因の細菌を乳汁から検出すること、細菌の種類によってそれを滅殺する薬品が決定されるが、琉球家畜衛生試験場に依頼すればやってくれる。薬品の決定がなされると方針は確立され、それによつて治癒は早く、大きな損害を被ることなく乳は早期に正常に還り、又他へ伝染することは防止される。或る種の薬品はサルファ剤、ペニシリン、ストマイ、オーレオマイシン等いくつかの薬品を組合わせて造られておる。単一の薬品で乳房炎細菌を滅殺することは今のところ不可能とされている。タルゴット軟膏、オーレオマイシン乳房炎軟膏は現在広く用いられているが評判がよい。しかし少数の細菌はこれ等の総ての薬品に抵抗する（所謂耐性菌）ので治癒に極めて長い日時と経費を要する。

6分挽直後の乳房炎 分べん直後1~2日間に本症に罹

(宮城 正夫)

る場合が極めて多い。特に乳牛に経験が浅いとその心配がある。分べん直後の搾乳について注意されねばならない点は乳房のむくみ（所謂しこり）を早くとり除けることで、それには蒸しタオルでよく乳房をマッサージして乳を搾り切るよう努める。勿論完全に搾り切るには日数を要するし、あのぼう大な乳房をもみほぐすのにはなかなか辛抱がいる。このように搾乳が完全に行かないところに細菌の繁殖、増数があり乳房炎を起す結果となる。要は早くその「しこり」を解くことですが、能力の高い牛特に初産牛はなかなか簡単に行かない。私共は「しこり」を早くとる方法としてイクタモールを適当の水で薄めておいて蒸しタオルでマッサージして血液の循環をよくした乳房に擦り込んでいるが好結果を取めている。しかしこれは4~5日も続く所謂薬まけで其処に熱を持つから2~3日の程度に止める。もし薬まけが治つたらホーサン軟膏等で保護する。又分べん初乳を搾り切つてから各乳頭にタルゴット軟膏を注入しているが、乳房予防に大きな効果を取めている。

取木、挿木法

3. 取木法

木本類やツル性の植物の繁殖に用いられる方法で、母木から切り離される前までに発根させ、既に完全な一つの植物体としての形態を具えるように処理する方法である。

古来、最も広く採用されてきた方法は伏せ取り方法で、地面に近く横に伸びている枝を押し曲げて地面に伏せその上に土をおく方法である。発根を認めたら枝を切り離して独立の個体として養成する。短い枝からは1本しかとれないが、長い枝やツル性の植物は節々から

新しい芽が出て、それらが充実した時、各々を分離して養成することができる。伏せ取り法では伏せられた枝の土中に入る部分でしかも幹に近い部分に輪状に皮をむくか、枝の土中で下になる部分に枝の直径の半分位、元の方から先端に向つて3cmの長さになり切り込むと発根を促進することができる。この方法でクチナシ、ツルバラなどが繁殖できる。

高取法は枝を自由に曲げることができない時、適当な長さの枝を選んで基部を環状に剥皮し、その部分が大体中間になるように竹の皮かビニール、ポリエチレンなど

で包み、その中に水苔や畑土あるいはそれらを適当に混合したものをつめて蒸気を持たせる。これも12ヶ月で発根するものもあるが1ヶ年以上かかるものもある。この方法でクロトン、ザクロ、ツツジ、サルスベリなど相当樹令の経たものでも繁殖することができる。

盛土法は地際でぞく生ずる種類に対して、土壌を盛り上げ、発根後株分けのように繁殖する方法で簡単なものである。一度春期新しい芽が伸びる前に地上10cm位で切断し、多数の芽が20cm位に伸びた時に肥土を周囲に盛り上げて発根させると比較的多量の苗が得られる。クワ、ボケ、ツツジなどに行なわれる。

取木などの場合でも植物の活動期に行うのが必要で春期新芽の発芽前か5月頃が適している。取木法では一度に沢山の苗を育成することはできないが、失敗がなく極めて安全な繁殖法である。挿木で繁殖できるものでも、取木で老生した大枝でも発根するもの各種庭園木に利用でき、家庭用繁殖法である。

4、挿木法

挿木は果樹、花卉の繁殖で実生法に次いで最も広く用いられる苗木繁殖法である。挿木をする場合には挿木場所、用土、時期、挿穂の選択、挿木の方法等が重要な問題となる。

1、挿木場所：挿木の環境は挿木の発根に大きな影響を与えるものである。挿木の数量により、また発根の良否により床挿、箱挿、針挿に分けられる。

床挿よさらに温床や冷床を用いる場合と、如挿とがある。温床や冷床は挿木後の管理がよく行なわれるから、比較的軟弱な草性植物や集約管理を必要とする植物を多数繁殖するために用いられる。沖縄では冬期間でも大底冷床で間に合うものである。冷床は普通巾1.2m長さ3.6mの框を、前方20cm、後方30～40cmにし、ビニールかポリエチレン障子を覆うて温度、湿度を調節する。この框の底部は必ず排水用の穴を設けるべきである。

露地で行う床挿は管理上から播種床と殆んど等しく、床巾1m内外にして知冊形で造る場合が多い。地下水位

の高い所では、地面より幾分高く設け、乾燥しやすい土地では地面と同じか、幾分低日に設ける。

箱挿は深さ8～12cm、巾30～45cm、長さ60～90cm位の浅い箱を準備し、その底は排水を良くするために底板に5mm位を間隔を2、3ヶ所設け、挿木用土を入れて挿木する。針挿はとくに小規模の場合に行なわれ、空気の流れをよくするために素焼鉢が用いられる、深さ8cmで、大きさ25～30cmの円形または方形のものか便利である。

2、挿木用土：挿木に用いる土壌は、排水よく、腐敗しやすき有機質を含むことなく、保水力があることが必要である。この点から、丸みをおびていない川砂が適当であるが、近年輸入されるパーライトやバミキュライトという物質はとくに優れた材料である。また水苔も用いられる。川砂を用いる場合は煉瓦などで強く鎮圧し、早く乾燥するのを防ぐようにする。

3、挿木時間：挿木の適期は植物の種類、生育状態によって異なる。草本類や周年発育する木本植物は殆んど時期を選ぶことなく発根する。常緑性木本ものは、多く梅雨期が適し、落葉性木本ものは、冬期落葉後枝を切り取って貯蔵し、春発芽前挿木する場合と春に枝を切り取って直接挿木する場合がある。また春芽が生育し、梅雨期で一時的に行う場合がある。

ある植物の活動期の直前、とくに貯蔵養分を茎に充分貯えている時を選び、組織の硬軟によって判断すべきである。また挿木の熟度によって木本茎（休眠茎）半木本茎、軟茎等に分けられ、植物の種類により適否がある。

4、挿穂の選択と調製：挿木に使用する部分は貯蔵養分を多く蓄積した充実した枝を用いることが必要である。一般に草性植物は発育した茎の先端がよく、茎が硬化した部分は発根が不良である。すなわち茎を折りまげて、ポキンと折れる部分までが良く、ねじれるような部分は、やや固すぎる状態にある。このような軟茎は水湿が多い場所や窒素肥料に偏る場所、日照の良くあたらぬ場所で作られたのは不良で、挿木後しおれるのが多い。軟茎を天挿、すなわち先端を挿木する場合は、長さ5～7

cmに節の下で直角に鋭利な刃物で切断する。節間からでもよく発根する植物は節の上部から切断しても差し支えない。葉は挿木床に挿される部分、つまり下半分を除去し、上部の葉は挿木後、しおれないように充分湿度を保たせることができれば切断しない方がよいが、普通の挿木など設備がととのっていない場合には、萎れることが多いから、葉の先端1/2~1/3を切断する。葉はなるべく多い方が植物体中の植物ホルモンの量の多く、よく発根し、活着後の生育も早い。

落葉樹は一般に冬期中前年中に生育した枝が用いられるが、ザクロ、サルスベリなど、古枝からでも発根する

ものは2.3年生の枝も用いられるまた新茎が一時生長を停止した時、梅雨挿、秋挿も行なわれる。

常緑樹は春期、新芽が活発に生長を始める直前においても行なわれるが、多くは新梢の生育が一時停止し、次期の生長を開始しない内が適当である。

挿穂の長さは種類、挿木法などにより異なるのがよいがパンジロウ、ザクロ、ハクチョウ、ゲ、シダレヤナギなどの部分からでも発根するものは、切断部によって発根に差異はなく、一時に多く繁殖する場合には節の上部から切断される。
(友寄 長重)

植物ウイルスについて (2)

先に本誌1962年12月号(No.85)でウイルスの定義と大きさ、形状などについて簡単に紹介致しましたが、今回はウイルス病の病徴と伝染方法などについて述べ、ウイルス病診断の一助としたい。

1. 病 徴

植物ウイルス病の病徴は気象条件、肥料条件、品種およびウイルスの系統などによって変化がある。また一つの植物に異なったウイルスの感染によっても類似の症状を現わすので病徴のみによる診断はかなり困難である。しかしウイルス病は特有な病徴を呈するので、習熟すれば病徴によるウイルス病の診断は必ずしも困難ではない。次にウイルス病の主な病徴を上げる。

1. モザイク症状

モザイク症状はウイルス病の中でもっとも多い病徴で、葉、ときに茎、まれに果実の緑色が部分的に褪緑して濃緑色(膨れ上る)と黄緑色~黄色の部分とが入り乱れて、すなわち地図状の斑紋となる。モザイクは黄緑色~黄色の条線、完全に黄色となる黄斑、緑色を完全に失なっ

た白色、褪緑部が脈間だけの脈間また葉脈透化や脈辺濃緑などがある。

同一植物のモザイク病が異なった2種のウイルスが単独にまたは複合感染する場合があって、しかも病徴も類似するので、いずれのウイルスによるかはむずかしい。例えばウリ類のモザイク病はキウリモザイクウイルスによる場合とカボチャモザイクウイルスによる場合とがある。またトマトやタバコのモザイク病もキウリモザイクウイルスとタバコモザイクウイルスによる場合とがある。十字花科植物も2、3のウイルスによることが知られています。モザイク状は遺伝的な斑入りや養分欠乏症と区別しにくい、多くのモザイク病は汁液伝染が可能であるから、植物に接種することによって早期に検定できる。一部のウイルス病では検定植物が決まっている。

(タバコのモザイク病、キウリのモザイク病、トマトのモザイク病)

2. 黄化: 植物の一部または全体が黄変する病徴で養分欠乏その他いろいろな原因によっても同様な症状が起き